



平成22年4月19日

卓話 『検察の仕事、情報の仕事(管見)』

弘中総合法律事務所 弁護士
前大阪高検検事長・元公安調査庁長官

大泉 隆史 様

今日お話をさせていただく機会を得ましたことを感謝しております。私が検事になって2年目、ベトナム戦争が盛んな時期、岩国の米海兵隊員を麻薬取締法で取り調べたことがあります。本人は最初否認していましたけど、最終的には確かに麻薬をやったと深く反省しました。それでベトナム戦争でどんなに大変だったかという彼に有利な事情を調べて証拠として出し、最終的に執行猶予となつたんですが、彼が法廷で検事の私のところに来ておんおん泣いて「大泉検事ありがとう、ありがとう」と言ってくれたことがあり終生忘れない事件です。一生懸命相手のことを思つてやれば心が通じるんだという体験として、私の検事生活を決定づける出来事でした。

検事の仕事は国民生活の基盤である法秩序を維持すること。基本は厳正公平。刑罰を徒らに振り回さないこと。刑は刑無きを期すです。肝心なのは事件の真相を解明すること。我国の検察の特色は公訴権を独占していることです。もう1つは政官財界の事件を検察が独自に捜査すること。これはあまり他国にありません。これらの事件は特捜部がやるのですが、大変でもやり甲斐があります。

今、国民の8割以上の方が治安の悪化に不安を持っています。無差別殺人とか振り込め詐欺、ひったくりなどが増えていて、我々しっかりしなきゃいけないと思っています。もう一つ捜査の困難化があります。昭和50年代、日本は世界で一番安全な国だといわれてたんですが、最近は検挙率が低下して平成19年には1/3くらいしか犯人が捕まっていない。捕まらないからまたやるんですね。そういう悪

循環について例えば通信傍受など捜査権限の強化も重要だと思います。

私は2004年から3年間、公安調査庁の長官をいたしました。北朝鮮が初の核実験を実施し、イスラム過激派の国際テロがあちこちで起つる状況でした。アメリカでは分析した情報をCIAのトップが毎朝大統領に報告するぐらい情報が重視されています。私も小泉総理のとき30数回行きました。総理は朝鮮に自ら乗り込んで拉致問題を解決しようとしたくらい関心があり、ここぞと思う時には眼をガッと見開いて一言も聞き洩らさんぞという形で聞いていただきました。北は経済的にも危機ですし核問題もある。これは交渉の道具としてやっているんではなく、本格的に強勢大国になりたいって彼らは言うんですね。海外から金を呼び込むためにもいろんな問題を起した方が得なんです。

イラク戦争の時、イラクに大量破壊兵器があるかどうか盛んに論じられ、最終的には当時のアメリカ情報機関から「間違いなくある」という情報が上がったと言われています。それでブッシュさんが開戦のボタンを押したけれど実際は何もなかった。あれは情報機関の方が政治家の意を受けてそういう情報を提供了とも言われてまして、情報機関は政治と一定の距離を置き、リーダーの意に添わなくても本当のことを伝えなきゃいかんという教訓となっています。以上です。

